

## 事例 10 ゴジカラ村（愛知県長久手町）

### 概要

ゴジカラ村は、雑木林の中で幼稚園、デイサービス、特別養護老人ホーム、グループホーム、ケアハウス等の高齢者福祉施設、看護師・介護士養成の専門学校、宿泊施設等を運営するほか、訪問介護・訪問看護事業も行っている総合福祉施設である。雑木林の保全・再生による地域の魅力づくりとともに、高齢者の地域での生き方に役割を見出す多世代が住まう地域コミュニティ作りに取り組む。時間に追われない生き方をすることを目指している。

テーマ	雑木林の中の多世代型エコビレッジ
主体・キーパーソン	社会福祉法人愛知たいようの杜ゴジカラ村、吉田一平
手法・技術	雑木林の保存を前提とする建物作り、 多世代交流 子どもと自然とのふれあい

### 背景

長久手町は愛知県北西部に位置し、名古屋市名東区と隣接する。同町は名古屋市のベッドタウンとして発展してきた。人口は約5万人、2010年5月現在で全国一人口の多い町である。隣接する瀬戸市と共に、2005年日本国際博覧会「愛・地球博」（愛知万博）の開催地にもなった。

ゴジカラ村は名東区にある雑木林の中にある（ただし、社会福祉法人愛知たいようの杜ゴジカラ村の本部は長久手町にある）。敷地面積は3ha（約1万坪）。吉田氏は、失われていく雑木林と地域のつながりを目の当たりにし、それらを守り、再生しようと、1981年に「愛知たいよう幼稚園」を作った。その後、特別養護老人ホーム「愛知たいようの杜」、幼稚園「もりのようちえん」、専門学校「愛知福祉学院」が開設され、ケアハウス「ゴジカラ村・雑木林館」やデイサービスセンター「ゴジカラ村」等の高齢者福祉施設も次々と開設された。

15年のサラリーマン経験がある吉田氏は「5時まで」の仕事の世界とは異なる、「5時から」の世界の大切さを唱えている。前者は「分業化」「専門化」「効率化」といったものを追求する世界で、「時間に追われる国」である。それに対し、後者は時間に縛られず、のんびりと過ごせる世界で、「時間に追われない国」である。ゴジカラ村の目指しているものは、後者のような自由でゆったりとした生き方である。



「ゴジカラ村」の場所

## 取り組みの内容

### 1. 多様な施設を開設

ゴジカラ村にはさまざまな施設が設置されている（2007年）。



「ゴジカラ村・雑木林館」の入り口



愛知たいようの杜

#### (1) もりのようちえん

約190人の子どもがいる。これは、ひたすら遊ぶだけの幼稚園である。

#### (2) ケアハウス「ゴジカラ村・雑木林館」

60歳以上で身の回りのことが自分でできる方が入居できるアパート。50名が入居している。

#### (3) 特別養護老人ホーム「愛知たいようの杜」

認知症の方を中心に80名が入居しており、20名ごとにグループを作り生活している。

#### (4) 愛知総合看護福祉専門学校

約200 人在籍している。看護師や保健士の資格が取れる学校。

(5) ほどほど横丁

グループホームと託児所が一緒になっているところ。



もりのようちえんの庭園



ほどほど横丁

2. 環境への配慮

- (1) 雑木林の保存を前提とし、極力木を切らないよう木を避けて建物を建てている。場合によっては屋根を切るという考えで建物は造られており、各個室の形もすべて違う。また、土地の傾斜をそのまま活かしている。
- (2) 曲がりくねった廊下、自然素材、デコボコ道等、管理されているような圧迫感のない空間を作るよう、心がけている。
- (3) 環境負荷の低い木造住宅を建てている。



森に囲まれて極力木を切らないように建てた建物



古民家



木造の建物（村役場）

3. いろいろな人の間の交流促進のため

(1) 開放的制度

託児所や幼稚園に通う子どもとその両親、専門学校生、ボランティアとさまざまな人が集まってくる。村で働く職員は子ずれ出勤もOK。村の食堂も一般の人が利用できる。陶芸活動を行い、村の周辺との交流に積極的に取り組む。

(2) 古民家

400年、200年、150年くらい前のものがそれぞれ一軒ある（足助町から移築してきたもの）。幼稚園、集会場、陶芸工場として使っている。皆がいろいろな使い方をして、様々な人がたくさん集まってくる。

(3) ほどほど横丁

一階には寝たきりの方が13人、二階にはOLが4人、また家族が1軒と、混在して住んでいるところ（2007年）である。そこでは、車いすで食事をしながら、上を見るとOLの部屋が見えるようなくみになっている。

(4) 子ども同士の交流

3歳～5歳の縦割りクラスで年上が年下の面倒を見る。給食はなく、子どもたちはお弁当を持ってきて、好きな相手と好きな場所で食べられる。ブランコや滑り台等の遊具は一切なく、子どもたちは木に登ったり、虫を追いかけたりして、自然の中で一日を楽しく過ごす。

(5) 多世代交流

施設も在宅も、職員が一人にかける介護保険サービスはせいぜい1日2時間分。残り22時間の暮らしを支える工夫が必要である。

① ヤギ、犬、鶏等の動物を飼い、幼稚園児を遊びに行かせるといった取り組みで、高齢者の不安と孤独を和らげるように工夫している。また、吉田氏はこうした「混ぜて」暮らすことを通じて、高齢者、ヘルパー、子どもたちそれぞれの「立つ瀬」ができると考えている。

② 「ミクスチャーハウス」というコレクティブ賃貸住宅（70戸）の来秋の入居を目指して、話し合いが進められている。高齢者、子育て世帯、OL、学生等入居希望者が設計段階から共有空間の活用や、ルールをつくる。孤立を防ぐ第一歩、コミュニティの再生への試みである。

## 成果と課題

2011年末にオープンする予定のミクスチャーハウスでは、入居前から交流を始め、家の図面作りを入居予定者が行う等、新しい取り組みが試みられている。

少子高齢化社会にとって、家庭内で高齢者の面倒を見るのが困難になってきた。こうした中、多くの高齢者は特別養護老人ホームや有料老人ホーム等の施設で生活するようになった。しかし、多くの高齢者たちにとって、施設は人間味のある快適な空間になるとは限らない。そこでの人間関係は「介護者－被介護者」の関係でしかなく、本来あるべき人間同士の交流は欠如していることが多い。ゴジカラ村は多世代交流を通じて、さまざまな人の間の相互理解を深め、高齢者の生活を充実化している。また、周辺地域が急速に都

市化するなか、ゴジカラ村では雑木林を守り、自然との調和の取れたコミュニティ生活を送ることができる。こうした環境づくりは、さまざまな交流活動を通して、周辺地域の人々にも一定の影響を及ぼしている。特に、自然への過度な介入を避ける建物作りの取り組みは、エコビレッジのあり方を考える上で、非常に示唆的である。

[参考文献・資料]

- ・ 吉田一平 (2007) 「ゴジカラ村—みちくさをゆるせる心のあるところ」  
[www.vns.or.jp/C05\\_hakkoubutu/C04\\_report//gojikara.pdf](http://www.vns.or.jp/C05_hakkoubutu/C04_report//gojikara.pdf)
- ・ 小林美津江 (2007) 「ゴジカラ村探訪記」、『立法と調査』274号、参議院常任委員会調査室・特別調査室。
- ・ ゴジカラ村 HP [www.gojikaramura.jp](http://www.gojikaramura.jp)
- ・ 長久手町 HP [www.town.nagakute.aichi.jp/](http://www.town.nagakute.aichi.jp/)
- ・ ゴジカラ村近状報告 <http://d.hatena.ne.jp/gojikaramura/archive>
- ・ エコビレッジ国際会議 HP [http://ecovi.begoodcafe.com/category/report/2010\\_2](http://ecovi.begoodcafe.com/category/report/2010_2)